

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520021

研究課題名（和文） 分析哲学とフィヒテ哲学

研究課題名（英文） Analytic Philosophy and Fichte' s Philosophy

研究代表者

入江 幸男（IRIE YUKIO）

大阪大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：70160075

研究成果の概要（和文）：20世紀のほぼ全体にわたって、一部の例外を除いて、おおよそヨーロッパ大陸哲学と英米分析哲学は分裂したままであった。しかし、近年分析哲学の一部からドイツ観念論への再評価が始まっている。本研究では、これを受けてフィヒテが純粋な観念論を構想していたことを明確にするとともに、それが現代の分析哲学（特に、内在主義的認識論、道徳における共有知論、反実在論）に貢献できる可能性を探った。

研究成果の概要（英文）：The European continental philosophy and Anglo-American analytic philosophy were separated in the twentieth century except a few cases. However some analytic philosophers in the USA value the German Idealism since two decades. In this research program I made it explicit that Fichte thought his Idealism in a genuine pure form and inquired the possibility for his philosophy to contribute the correspondent analytic philosophy, esp. internal epistemology, theory of common knowledge on moral rules, and anti-realism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	300,000	90,000	390,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：西洋哲学

1. 研究開始当初の背景

ドイツ観念論の研究はドイツおよび世界

において長い歴史を持っており、英米を中心とした分析哲学とは殆ど交流を持とうとし

てこなかった。また、分析哲学の方も、ドイツ観念論を含む西洋近代哲学の研究を積極的に行おうとはしてこなかった。しかし、最近の分析哲学は、大陸の近代哲学史の研究に強い関心を寄せている。私は2005年にドイツのパスサウとアメリカのピッツバーグで5ヶ月ずつ研究する機会を与えられたが、その際にアメリカでのドイツ観念論研究が予想以上に勢いがあることに驚かされた。ピッツバーグ大学のEngstrom准教授は、その理由を、分析哲学がある程度成熟したことを踏まえて、分析哲学がどのような哲学史的な背景から生まれてきたのかについての反省が始まっていると説明してくれた。そして、ドイツで感じたことは、ドイツの研究者たちもまた、この分析哲学の立場からのドイツ観念論研究に大きな関心を向けているということであった。

2. 研究の目的

(1) 直観による知の基礎付け主義と決断主義との矛盾の解決

フィヒテによれば、整合的に考えられる哲学体系は、物の自立性を出発点にする实在論と自我の自立性を出発点にする観念論だけである。ただし、この二つは、まったく異なる立場なので、(ちょうど科学哲学におけるパラダイム間の共約不可能性のように)両者の間の論争すらも不可能であり、どちらが正しいかを理論的に決定することは出来ない。フィヒテは、どちらの立場を採用するかは、哲学者の決断にゆだねられていると主張して、彼自身は観念論の採用を決断する。これは現代における知の決断主義の立場と同じである。

他方でフィヒテは、観念論が出发点にする自我の自立性、つまり措定するものと措定されるものが同一である「事行」について、それを捕らえる哲学者の「知的直観」を認める。これは根本的な知を直観によって基礎付ける立場になる。

しかし、もし「事行」を知的直観によって捉えられるのであれば、我々は事行から出発して我々のすべての表象を説明する立場、つまり観念論を決断によって選びとる必要はないはずである。逆にもし観念を採用するために決断がひつようであるとすれば、我々には観念論を正当化する他の手段(直観や推論)がないことになる。つまり、フィヒテ哲学は、知の基礎付けに関して、基本的な矛盾を抱えているように見える。

<フィヒテの主張を整合的に理解しようとするならば、我々は矛盾しているように見えるこの事態をどのように解釈したら良いのだろうか>これが、本研究の第一の課題である。これはフィヒテ解釈の根本問題である

のみならず、知の基礎付け問題に関する現代哲学の課題にもかかわってくる。

(2) 知的直観と命題知の関係の解明

セラーズが「所与性の神話」を批判したように、直観と命題知は、異質である。例えば、我々は目の前の壁の色を感性的に直観するが、しかしその直観と「この壁は白い」という命題の主張の間には大きな隔たりがある。フィヒテ自身もまた、事行や知的直観を言語で表現することが困難であることを明確に自覚していた。<事行および知的直観を言語でどのように表現しうるか、あるいはフィヒテにとっては同じことであったのだが、概念でどのように把握しうるか>を考えるとときに、フィヒテの念頭にあったのは、<言葉で表現したり概念で把握したりするとき、我々は客観(対象)を主観から分離することになるが、しかし事行は(そしてまた知的直観も)「主観-客観」と表記されるような主客の統一である>という矛盾であった。ここには事行(=主観-客観)を指示することの不可能性という問題があり、これはバトナムが水槽脳の思考実験で語っていた問題と同じ問題である。イエナ期のフィヒテのテキストをその見地解釈できることについては間違いないと思いますが、その際に、分析哲学での議論を援用しながら、知的直観と言語の関係の分析を進めたい。

(3) フィヒテの後期知識学の解釈

このようなイエナ期のフィヒテ知識学の解釈を延長して、1801年以後の後期知識学の展開においても、<フィヒテがそこで意図していたのは、彼自身がまだ曖昧だと考えていた、事行と知的直観と言語(概念)の関係をより明確にしようとする試みであった>と理解することによって、前期から後期にわたるフィヒテ知識学の展開全体について、首尾一貫した説得的な説明を行いたい。

(4) フィヒテの道徳論と他者論を現代の分析哲学の議論に関連付けて発展させること

フィヒテの道徳の超越論的論証や他者への「促し」理論は、それ自体現代的な意義をもつものですが、そこでの議論を、分析哲学の道具立て、特にアンスコム「実践的知識」概念や、オースティンの「行為遂行型発話」の概念などを用いて解釈し、その議論をさらに展開することによって、現代の道徳論や他者論をめぐる議論にも貢献したい。またこれを上記の知識学の解釈と結びつけて、フィヒテ哲学の全体像を描きなおしたい。

3. 研究の方法

(1) フィヒテ哲学研究から現代の分析哲学に

貢献するという課題を遂行する方法としては、両者に共通する問題設定に注目することである。フィヒテが知識学で探求しようとしたのは、「知とは何か」「知はどのようにして成立するのか」と言う問題である。これは現代の知識の哲学と基本的には同じ問題であるので、そのとき、フィヒテが内在主義的認識論の一種になることを発見できる。

(2) フィヒテ哲学研究から現代の分析哲学に貢献するという課題を遂行する方法としては、フィヒテ哲学の議論を、現代哲学の手法や道具立てを用いて解釈することによって、フィヒテ哲学の現代分析哲学への活用を可能にすることである。現代の言語行為論や共有知論をフィヒテ解釈に用いることによって、フィヒテ哲学のあいまいであった部分を明確にすることができ、それによって新しく理解されたフィヒテ哲学を現代分析哲学の研究に利用することが可能になる。

4. 研究成果

(1) 目的の(1)「直観による知の基礎付け主義と決断主義との矛盾の解決」については、2006年の国際フィヒテ協会大会（ドイツ・ハレ）での発表をもとに研究を進め、2007年6月に日本ディルタイ協会関西大会で発表し『ディルタイ研究』に論文として掲載した。また国際誌 Fichte Studien に投稿した（現在校正中）。その発表原稿は、私のHPで公開している。

(2) 上記の課題を考察する中で、フィヒテの観念論を非常に純粋な徹底的な観念論として理解すべきであるということがわかり、それによって目的③「フィヒテの後期知識学の再解釈」についても見通しを得ることができた。つまり、フィヒテの前期の知識学から後期の知識学への変化が、内在的なものとして理解可能になり、従来語られてきたフィヒテの変説問題についても、新しい明確な解釈を提出することができるようになった。

(3) このような知識学の見直しと平行して、後期知識学や『意識の哲学』における「普遍的思考」が、現代の共有知論と類似性をもつことから、これを現代哲学や語用論との関係の中で読み直す試みをし、その成果を11月に日本フィヒテ協会大会の会長特別講演で発表した。これもまた、私のHPに公開している。

(4) 2007年夏に現代の分析哲学および論理学の知見とフィヒテ哲学を結び付けるべく、論理学と科学哲学の国際学会（北京）で発表を行い、意見交換をおこなった。これらの研究の結果、フィヒテ哲学と言語行為論との関連付けに加えて、フィヒテの観念論と現代の反実在論を結びつけることを考えるようになった。

(5) アメリカにおける近年のドイツ観念論研

究の状況を知るために、Rockmore, “Hegel, Idealism, Analytic Philosophy” を精読し、成果を書評にまとめて公表した。この作業を通じて、分析哲学の成果をフィヒテ研究に生かすというアプローチではなく、むしろフィヒテ研究を現代の分析哲学研究に生かすというアプローチの可能性に眼を開くことになり、研究態度の大幅な変更を意図するようになった。具体的には、フィヒテの観念論を現代の反実在論に結びつけて、その立場の擁護に利用するという方針である。

(6) フィヒテの「普遍的思考」と現代の「共有知」の関連付け。後期フィヒテ哲学における「普遍的思考」ないし「我々」の議論を、現代哲学における「共有知」概念と結びつけて考察しようとした。この成果の一部は、ソウルで開催された第13回世界哲学学会大会で研究発表に生かされている。そのときの質疑は大いに刺激になった。また一部は、『『意識の事実』(1810)における諸自我と普遍的思考』(『フィヒテ研究』第16号)として公表した。

(7) 目的(2)「知的直観と命題知の関係の解明」を行った。フィヒテの観念論の基礎にあるのは、「知的直観」である。この概念と分析哲学の関連を調べる中で、現代アメリカの哲学者 Bonjour が、「知的直観」とよく似た概念を提案していることがわかった。Bonjourの内在的基礎付け主義とDaummettの反実在論の関連を追及することで、分析哲学にフィヒテの観念論を生かすことができるという見通しを持つことができた。

(8) フィヒテと現代分析哲学とりわけ内在主義的基礎付け主義との異同を明らかにし、それをもとにフィヒテ研究を現代の内在主義的基礎付け主義に生かそうと試みた。Bonjourの知的直観による知の基礎付けは、フィヒテからの直接の影響によるものではないが、フィヒテの知的直観の議論とにており、それと同様の問題を抱えていることが明らかになった。この成果は、2009年6月に東北大学で開催された日本ヘーゲル学会シンポジウム「分析哲学とドイツ古典哲学」で発表した。この研究のなかで、基礎付け主義と意味の全体論は矛盾するにもかかわらず、ドイツ観念論ではその両方が主張されており、この点を解明する必要があることが分かった。

(9) 後期フィヒテの哲学は、現代の共有知論の先駆と見ることが出来るものである。共有知の存在証明は、理論的な困難を抱えているが、フィヒテは、道徳的関係の説明において共有知の想定が不可欠になることを論証しようとしており、これは現代哲学に貢献できる論点である。この成果は、2009年10月にブリュッセルで開催された国際フィヒテ協会大会で発表した。フィヒテの議論は難解で、彼の共有知論が成功しているとは言えない

が、道徳論の文脈で共有知を論じることは、Michael Thompson (ピッツバーグ大) がすでに試みていることであり、両者の議論を付き合わせて、共有知論の存在証明を試みるという一つの研究方向が明らかになった。

(10) 三年間の研究の最後に、『研究成果報告書』を冊子に取りまとめた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 入江幸男、'Question-Answer Contradiction' [査読なし] in *Philosophia Osaka*, Nr. 5, Published by Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, 2010
- ② 入江幸男、'A Proof of Collingwood's Thesis' [査読なし] in *Philosophia Osaka*, Nr. 4, Published by Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 69-83, 2009
- ③ 入江幸男、『意識の事実』(1810)における諸自我と普遍的思考、[査読なし] フィヒテ研究、第16号、pp. 2-19、2008
- ④ 入江幸男、'What's Going on, When We Share Knowledge?', [査読なし] in *Philosophia Osaka*, Nr. 3, Published by Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 37-50, 2008
- ⑤ 入江幸男、観念論を徹底するとどうなるか—フィヒテ知識学の変化の理由—、[査読なし] デイリタイ研究、日本デイリタイ協会発行、(査読なし)、第18号、pp. 38-54、2007、

[学会発表] (計7件)

- ① 入江幸男、フィヒテのスピノザ批判、大阪大学文学部共同研究「ドイツ思想史における虚軸としてのスピノザ」研究会、2010年1月30日、大阪大学
- ② 入江幸男、"Die Möglichkeit des kollektiven Wissens bei Fichte" in The VII International Fichte Kongress, Oct. 9. 2009, The Royal Academie, Brussel
- ③ 入江幸男、内在的基礎付け主義とドイツ観念論、日本ヘーゲル学会シンポジウム「ド

イツ観念論とポスト分析哲学」、2009年6月13日、東北大学

- ④ 入江幸男、"Our Practical Knowledge" in The XXII World congress of Philosophy, Seoul National University, Aug. 4. 2008, Seoul, Korea
- ⑤ 入江幸男、「意識の事実」における諸自我と共同自我、日本フィヒテ協会第23回大会、会長特別講演、2007年11月17日、大阪大学
- ⑥ 入江幸男、"Contradiction in the Question-Answer Relation" in The 13th International Congress of Logic Methodology and Philosophy of Science, Aug. 10. 2007, Tsinghua University, Beijing, China
- ⑦ 入江幸男、フィヒテ哲学の全体像を求めて、日本デイリタイ協会関西研究大会、2007年6月30日、関西大学

[図書] (計1件)

- ① 入江幸男、(共著) グローバルエシックス、ミネルヴァ書房、2009年、(担当箇所「グローバル化時代における「会話」と「議論」—議論の優位性をめぐって」 pp. 151-176)

[その他]

ホームページ等

研究成果を以下の URL に公表した。

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~irie/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

入江 幸男 (IRIE YUKIO)

大阪大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：70160075